

若手研究者をとりまく学会の現状と課題(仮)

五十嵐涼介(東京都立大学)

遠藤進平(一橋大学)

本WSは若手支援WS準備会により企画された。WS準備会は、提題者に加えて、以下のメンバーにより構成されている(順不同・敬称略)。

飯泉佑介(京都大学)

太田匡洋(早稲田大学)

太田雅子(東洋大学)

後藤真理子(九州大学)

西條玲奈(大阪大学)

朱喜哲(大阪大学)

筒井晴香(東京大学)

中根杏樹(慶應義塾大学)

樋口朋子(エラスムス大学)

三木那由他(大阪大学)

森田紘平(名古屋大学)

横野沙央理(城西国際大学)

横田祐美子(立命館大学)

1 WS 趣旨

本WSの主眼は、これまで開催されてきた若手支援・男女共同参画に関する取り組みの成果を踏まえつつ、現在若手を取りまく学会の現状と課題について、若手研究者自身の立場から考えることにあつた。

本WSで提題される内容は、様々なキャリア・ジェンダー・バックグラウンドを持つ若手研究者により構成される、若手支援WS準備会での議論を基にしている。これにより、これまで必ずしもすくい上げられてこなかった様々な声を聞き入れつつ、今後の日本哲学会、ひいては日本の哲学界全体をどのようにしていくべきなのかについて、より踏み込んだ議論を展開することが可能になったと思われる。本WSでは、このように若手研究者が、自分自身の問題として考えた支援のあり方と展望を、哲学界全体の改善を目指す方々と広く共有する機会としたい。

2 若手研究者のキャリア形成と学会運営

哲学の学会組織は、大学を中心としたキャリアモデルの人間によって運営されてきたという実態がある。すなわち、大学院に在籍し、研究活動を中心とした人生設計に立つとともに、大学のなかでアカデミックポストを見つけるというキャリアモデルである。そして、諸学会の開催校や理事・会長などもまた、そのような大学教員が持ち回りで割り振られることで、運営されてきた。

しかし、現在大学を取り巻く社会情勢が悪化の一途をたどっていることは論を俟たない。そのなかで、特に若手研究者の雇用問題が深刻化している。このような背景のもとで認められるのが、研究におけるキャリアパスの多様化である。より具体的には、次のような特徴を指摘することができる。

第一に指摘されるのが、若手研究者の高齢化である。たとえば日本哲学会の出版助成金の対象は、「若手・中堅会員」と定められているが、40歳以下という年齢制限があり、研究者の実態からの乖離が指摘されている。科学研究費助成事業の若手研究への応募資格が「博士号取得から8年未満」と変更されたように、「若手」問題を扱う際には年齢ではなくキャリアに焦点が当てられるのが通例であり、日本の哲学界のように若手研究者というカテゴリーを年齢ベースで考えることの是非が問い直される必要がある。第二に、在野研究者の増加である。具体的には、大学にテニユアの職をもたず、民間で職を得ながら研究を継続する者が増加してきており、この傾

向は今後も増大してゆくものと思われる。

本提題では、以上のような現状認識のもと、(1) 現在生じている・今後生じうる問題の共有と、(2) これらの問題を解決するために今後の学会が何をなすべきかについて提言を行う。

3 実効的な若手支援

若手の研究・労働環境に関しては、これまでも様々な支援がなされてきており、ここ十数年の間に、院生・若手・女性に対する支援策は多様化し充実化してきている。さらに今後数年で、政府はさらに重点的な政策を行うと宣言している。

しかしながら現状の日本哲学会をはじめとした各学会の対応を見ると、各種ハラスメントや雇用問題については、若手研究者が効果を実感できるような支援策の実施には至っていないというのが現実であろう。特に非常勤問題をめぐる問題については、教育スキルを若手に教える、エントリーの手続きを見直すなどの取り組みに終始してきた傾向にあり、雇用関係や労働環境をめぐる諸問題への対応については、十分なリソースが投入されてこなかった傾向がある。しかしながら、若手の非常勤講師が一番困るのは、例えば非常勤問題で契約先から一方的な予定変更や減給に遭うなどの、労働環境の悪化である。これに対して、現状では非常勤講師同士のつながりが乏しく、労働条件の相場なども曖昧なままにとどまっている。したがって、若手研究者を個別に支援するような対策によっては、本質的な解決には至らないと考えられる。

本提題では、このような状況を改善するために各学会が取り組みうる方策を、国内外・様々な分野での取り組みを参考にしつつ提言する。